肺がん検診（地域）

動 向

平成26年度地域住民対象の巡回肺がん検診は実施市町村11団体、受診者数7,879名であった。

綾瀬市では、当協会と医師会とのダブル読影体制（オープンダブルチェック）を実施しており、一次検診フィルムの比較読影のチェックのみならず精密検査機関へのデータ提供の利便を図っている。また、医師会で開催されている精密検査フィルム読影会（カンファレンス）に専門医師・放射線技師・担当職員等が参加し、フィルムの比較、再検証等を行うことで一次検診の精度向上に努めている。

厚木市では、平成13年度より受診者の拡大を目的として、集団検診による肺がん検診から施設医療機関で実施している基本健康審査との併用検診（施設による個別検診）に移行している。医療機関にて直接撮影を実施し当該施設の医師による一次読影、当協会の専門医師による二次読影の体制により、読影結果を医療機関へフィードバックしている。平成26年度読影数は20,365件であった。なお、集団検診同様にフィルムの精度管理や精検結果把握のためカンファレンスを実施している。

大和市においては、平成20年度より厚木市同様の肺がんフィルム二次読影を実施しており、平成26年度の読影数3,750件となっている（集団検診と二次読影の併用）。また、レントゲン撮影機器のデジタル化に伴い、デジタル画像による依頼読影の比率が年々増えてきている。厚木市と同様に今後、更なるデジタル化の拡大が予想される。

結 果

地域の肺がん検診は市町村が中心であるために一団体あたりの受診者数は職域に比して多いのが通例である。本年度は11団体7,879名（昨年度は12団体8,018名）で139名減となっている。性別では4：3で女性が多く地域の特徴が表れている。要精検者は2.4%でそのうち精検受診者は76.7%、148名と職域と比べて精検受診の勧奨、教育がよく理解されているといえる。表2はX線検査の読影では二重読影を原則としているが比較読影は読影医の判断によるもの

の最近のDRでは殆ど前回の画像が同時に描出される。

判定はA、B、C、D、Eの5段階であるが、Aは0.0%、D、Eは193名、夫々0.9%、1.6%である。表3は肺がん検診に先立つ問診により、喀痰細胞診を選定した数と外部施設からの依頼細胞診は細胞診の総数は1,010名で夫々373名と637名で総数1,010を示しているが、今回の検診ではC、D、E判定は夫々0であった。

表4は検診の結果を市町村別及び性別であるが本年度は8名の肺がん患者が該当した。0.1%の高頻度である。伊勢原市が595名から、あとは1名ずつで11市町村中以下の5市町村で綾瀬市、大磯町、開成町、湯河原町、愛川町である。愛川町は2,549名と最多検診地区である。本年度は8名中4名が女性である。肺がんの夫々の病期、組織型は全容を知り得ない。表5は年齢階級性別と肺がん例である。特徴は全肺がん例が75歳～79歳台が3例、共に男性。70歳～74歳台は男女1例ずつ、65歳～69歳は全例2例中女性が2例、60～64歳台1例で女性、と全年齢は60歳～79歳までの年齢階層で高齢層に好発する傾向は定説通りである。

表6は依頼読影（厚木、大和市）の件数であるが昨年度はこの3年間で最多件数を記録した。地域医師会による一次検診と読影後（全く読影記録のない施設が約半数にみられるが）の当協会による二次読影である両市併せて24,115件である。要精検者数は5.18%である。表7は年齢別にみた件数で70歳～74歳が4,955件、ついで75歳～79歳と高齢者層に高い数字で両市共に同様の傾向にある。表8は判定別の件数であるがAが夫々0.5%、0.2%がみられるのは読影X-Pが従来の現像方法によるものか、あるいはデジタル化された画像であろうが読めない画像ができてしまうのはやむを得ない（勿論、画像の改善に努力すべきは当然であるが）。D、Eは2.2%、3.0%と比較的常識の範囲内にあると考えられる。

関係の集計表は84頁に掲載